

令和2年度

劇場・音楽堂等機能強化推進事業

(劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業)

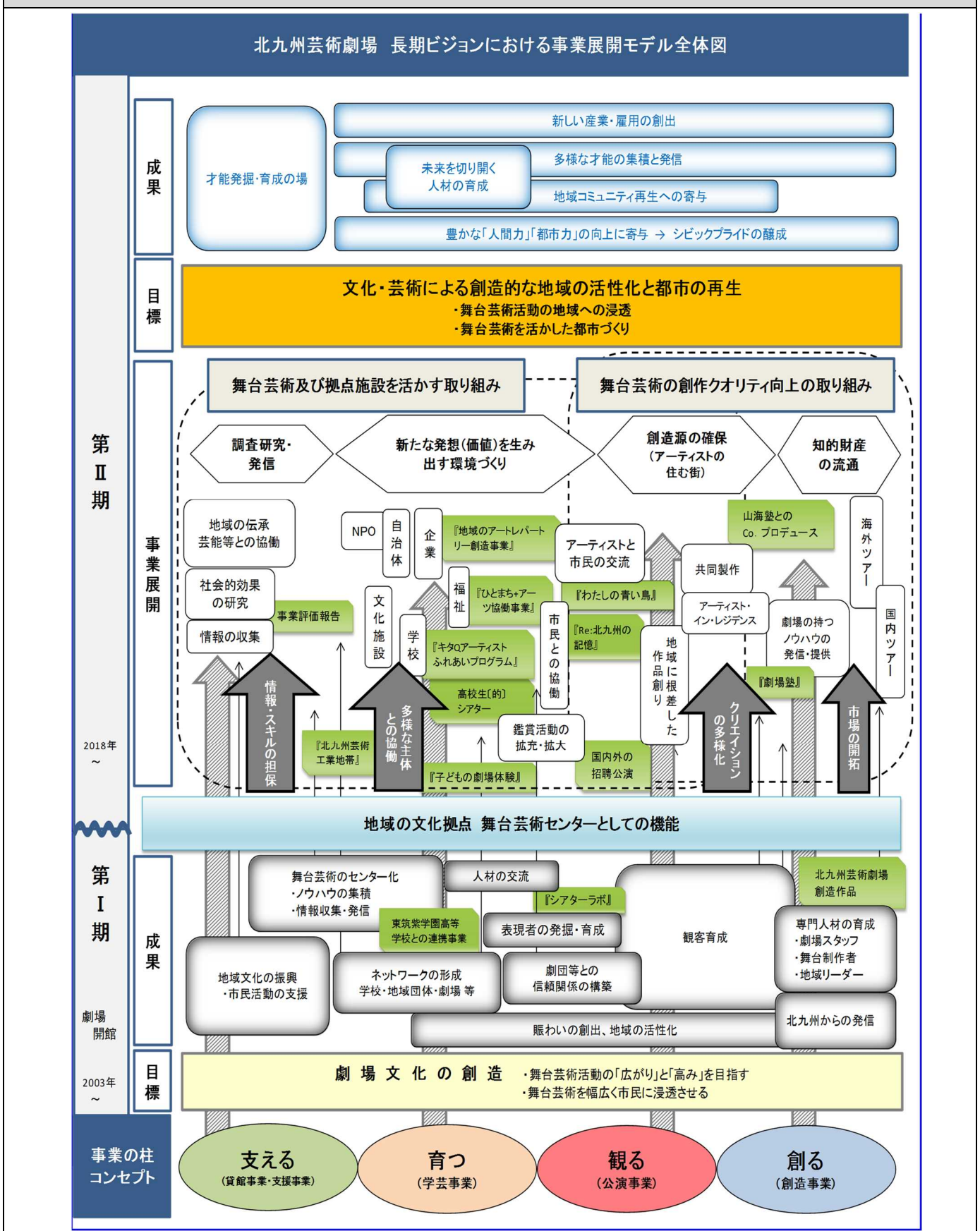
自己点検報告書

団 体 名	公益財団法人北九州市芸術文化振興財団
施 設 名	北九州芸術劇場
助 成 対 象 活 動 名	創造都市=クリエイティブ・シティ実現に向けた『北九州芸術劇場・長期ビジョンに基づく中期計画』
助 成 期 間	5 (年間)
内 定 額	33,232 (千円)

1. 事業概要

(1) 事業計画の概要

全体図（概念図）



(2) 令和2年度実施事業一覧

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	大人も一緒に子どもたちの劇場シリーズ 2020-海外編-	令和2年3月23日 (中止)※	新型コロナウイルス感染症の影響で公演を中止した。	目標値	308
		小劇場		実績値	-※
2	北九州芸術劇場プロデュース ／市民参加企画合唱物語 「わたしの青い鳥 2020」	令和2年6月28日	[小劇場]合唱：上瀧征宏、門司智美ほか、 ピアノ：岩佐靖子 [ZOOM参加]市民23名、 伊藤晴、白石光隆、能祖將夫	目標値	350・80
		小劇場(ZOOMにて配信)		実績値	-※
3	「二分間の冒険」	令和2年7月25日 ～26日(中止)※	新型コロナウイルス感染症の影響で公演を中止した。	目標値	190・30
		小劇場		実績値	-※
4	マームとジプシー 「cocoon」	令和2年8月9日 (中止)※	新型コロナウイルス感染症の影響で公演を中止した。	目標値	315
		中劇場		実績値	-※
5	モーツァルト 歌劇「フィガロの結婚」～庭師は見た!～	令和2年10月18日	指揮/総監督：井上道義、演出：野田秀樹 ※新型コロナウイルス感染症の影響で海外キャストを国内キャストへ変更	目標値	761
		大ホール		実績値	539
6	「ヴォイツェク」	令和2年10月31日 ～11月1日(中止)※	新型コロナウイルス感染症の影響で公演を中止した。	目標値	182
		小劇場		実績値	-※
7	「ピーター&ザ・スターキャッチャー」	令和3年1月24日	脚本：リック・エリス(脚本家・ウォルトディズニースタジオアドバイザー) 演出：ノゾエ征爾(劇団はえぎわ主宰)	目標値	786
		中劇場		実績値	218※
8	北九州芸術劇場+市民共同 創作リーディング「Re:北九州の記憶」	令和3年2月20日～21日※	構成・演出：内藤裕敬(南河内万歳一座) ※新型コロナウイルス感染症の影響で一部変更して実施	目標値	231
		小劇場		実績値	178
9	子どもと大人のためのダンス「日本昔ばなしのダンス」	令和3年1月16日	構成・演出・振付：山口夏絵、近藤良平 出演：鎌倉道彦、藤田善宏、山本光二郎、 近藤良平、稲村はる、宮内愛、山口夏絵	目標値	252
		中劇場		実績値	115
10	北九州芸術劇場こどもプロジェクト「あそびのじかん」	令和2年10月11日 ～12月6日※	全体コーディネーター：守田慎之介 ※新型コロナウイルス感染症の影響で一部中止して実施	目標値	40
		創造工房内稽古場		実績値	9※
11	高校生[的]シアター	令和2年12月5日 (一部中止)※	講師：平原慎太郎、守田慎之介、門司智美、脇内圭介、山口大器 ほか	目標値	100
		創造工房内稽古場		実績値	17・2※
12	劇場塾 2020～オープンレクチャー	令和2年12月26日 令和3年1月20日	講師：木ノ下裕一(木ノ下歌舞伎主宰)・ 吉本有輝子(舞台照明デザイナー)	目標値	60
		小劇場		実績値	64
13	市民劇場文化サポーター育成事業	令和2年4月 ～令和3年3月	市民芸術文化サポーター	目標値	30
		北九州芸術劇場内		実績値	26

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
14	ダンスダイブ～ワークショップ編～	令和2年9月13日 令和2年12月5日	講師：平原慎太郎・入手杏奈	目標値	60
		創造工房内稽古場		実績値	34※
15	キタQアーティストふれあいプログラム	令和2年9月28日 ～12月9日	講師：有門正太郎・セレノグラフィカ・中村蓉	目標値	1,000
		市内小・特別支援校		実績値	343※
16	ひとまち＋アーツ協働事業	令和2年6月 ～令和3年1月	アーティスト：有門正太郎・守田慎之介	目標値	150・60
		大ホールほか		実績値	86※
17	学芸事業調査分析→発信事業（仮）	令和2年4月 ～令和3年2月	学芸事業について調査分析及び発信	目標値	-
		北九州芸術劇場		実績値	-

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価

事業計画に必要な構成要素が有機的に連関し、当初の予定通りに事業が進められているか。

北九州市のまちづくり基本構想及び文化振興計画が示す方向性を踏まえ、劇場運営方針の4つのコンセプト「創る・育つ・観る・支える」において演劇やダンスを中心とした事業運営を行い、『文化・芸術による創造的な地域の活性化と都市の再生』を目標に「舞台芸術活動の地域への浸透」と「舞台芸術を活かした都市づくり」の達成を目指す。運営においては「クリエイションの多様化」「市場の開拓」「多様な主体との協働」「情報・スキルの担保」の視点を持ち、多彩な鑑賞事業、地域住民との作品創作、普及・人材育成事業などを実施している。

- 令和2年度は17事業を実施予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響により、4事業が中止、3事業が一部中止・延期、その他の事業も実施計画の一部を変更し実施。
- 舞台芸術の多様性を提示し幅広い年齢層に新しい出会いを創出するため、演劇・ダンス・オペラの鑑賞事業を実施。収容人数制限や感染拡大懸念の影響もあったが、WEBを活用した周知や徹底した感染防止対策を講じ安心して鑑賞いただける環境整備に努め、入場者率は75%以上を達成した。生の舞台に触れあらためて芸術の素晴らしさや価値に気付いたという来場者の声も多く、新しい生活様式の中でもその多様性を提示した。
- 市民参加作品の創作中止(延期)、高齢者関連企画の一部変更などもあったが、公演当日に過去参加者やアーティストがオンライン上で参加する生配信や地域の演劇人による戯曲リーディング配信企画を実施。より広域かつ幅広い層に向けて事業主旨や実施目的も含めて発信することで、九州圏域の拠点劇場としてのプレゼンスを高めることができた。また、コロナ禍において地域での創造活動維持が困難な状況となる中、地域で活動する表現者と共に「創る」ことでその環境や創造源を確保し、地域の文化拠点としての役割を果たした。
- 一部中止や企画変更はあったものの、コロナ禍における学校行事の中止や人との出会い・体験機会の減少などの状況も踏まえ学校や連携団体と協議を重ねながらアウトリーチやワークショップを実施。人数制限により例年よりも参加者数は減少したが、事業ごとに実施対象を異なる世代に設定したり、実施時期の状況に合わせてオンラインに切り替えるなどの工夫をしながら、舞台芸術が持つ力や地域の拠点施設としての機能を活かす取り組みを丁寧かつ着実に進め、その力を市民に広く還元し、新しい発想や価値を生み出す環境づくりへと繋げた。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

- 文化的意義：自主事業として初のオペラ公演を実施（「フィガロの結婚」）。音楽界・演劇界を代表する鬼才がタッグを組む作品であり、劇場へはじめて来場した方が全体の約2割となるなど市内外から多くご来場いただいた。また、地元の楽団と合唱団も本番に参加し共に作品を創り上げ、その中でのつながりや交流が生まれたことは今後の地域での活動の大きな刺激となり、舞台芸術活動の地域への浸透に寄与した。
- 社会的意義：9年目となる「Re：北九州の記憶」ではコロナ禍で予定変更した部分はあるが、地域の演劇人との作品創作と市内図書館での関連企画を継続。劇場単体だけでなく地域の表現者や文化施設などと関係性を築きながら進めることで、地域への認知拡大やアーカイブに繋がった。また、「キタQアーティストふれあいプログラム」「高校生〔的〕シアター」など小学生～高校生をターゲットにした普及・人材育成事業や若者就労支援施設との連携・協働による作品創作・発表を実施し、多様な地域住民のそれぞれのライフステージに寄り添い、舞台芸術との新しい出会いや交流する機会を創出した。
- 経済的意義：『大人も一緒に子どもたちの劇場シリーズ』として実施した「日本昔ばなしのダンス」「ピーター&ザ・スターキャッチャー」では、低廉なチケット料金の設定や親子セット券販売を行い、作品のコアターゲット層はもちろん新しい観客の開拓にもつなげ、舞台芸術に親しむ観客層の増加を図ることができた。

(2) 有効性

自己評価

目標が達成し、アウトカムの発現は可能か。

●アウトカム① 知的財産の流通

新型コロナウイルス感染症の影響は受けながらも、以下のような工夫をして知的財産の流通を促進した。

- ・「フィガロの結婚」(539人 75.8%)、「ピーター&ザ・スターキャッチャー」(218人 76.8%)、「日本昔ばなしのダンス」(115人・83.3%)といったオペラや演劇、ダンスと幅広いジャンルの作品招聘に取り組み、収容率50%制限がかかる中(発売後解除した公演もあり)ではあったが、来場者は収容率50%制限席数のうち75%以上であった。コロナ禍ということもあり観劇経験のある観客がやはり多かったが、鑑賞経験が初めての観客の割合は全体の15%であった。アンケートにおける総合的満足度は98%を達成しており、観客の求める質の高い作品を招聘・上演できていると考え、今後も安心安全な鑑賞環境を整備し新しい観客の割合を増やしていきたい。
- ・新型コロナウイルス感染症の影響により、海外作品2本(大人も一緒に子どもたちの劇場シリーズ2020ー海外編ー)や国内ツアー作品3本(「二分間の冒険」、「cocoon」、「ヴォイツェク」)が中止となったが、「ヴォイツェク」についてはカンパニーと協議を重ね、新しい作品(Theatre Park「月夜のファウスト」)を上演した(提携公演)。また、「Re:北九州の記憶」ではこれまでに完成した戯曲を市内図書館に設置しているが、今年度の戯曲についても設置した。

●アウトカム② 創造源の確保(アーティストの住む街)

新型コロナウイルス感染症の影響により、合唱物語「わたしの青い鳥」はワークショップと公演が延期、「Re:北九州の記憶」については高齢者へのインタビューが中止となった。合唱物語「わたしの青い鳥」については、劇場公式YouTubeでのライブ動画配信に初めて取り組み、リアルタイム視聴やアーカイブでは再生回数842回という成果を残すことができた。「Re:北九州の記憶」では、地域劇作家・俳優とこれまでの戯曲をオンラインで紹介する関連企画として4作品のリーディング動画を配信し、アーカイブで再生回数2,150回となった。また地域で活動する表現者(劇作家・俳優・スタッフ)とともにリーディング公演を実施し、収容人数制限下ではあったが入場率95%となり、コロナ禍においても作品創造を止めることなく、事業の取り組みや創造の場としての劇場やアーティストがいる街であることをより多くの人に発信することに成功した。

●アウトカム③ 新たな発想(価値)を生み出す環境づくり

事業の参加対象を広く一般(「劇場塾2020」)から、小~中学生(「キタQアーティストふれあいプログラム」)、高校生(「高校生[的]シアター」)、4歳~6歳の子どもとその家族・高校生・若手ダンサー・40代~50代(「ダンスダイブ~ワークショップ編~」)などに分けて実施することで、幅広い年齢層が舞台芸術に触れる環境を提供することができた。また「Re:北九州の記憶」や「ひとまち+アーツ協働事業」では地域にある図書館や福祉事業団などと連携するなど、4分野との連携を維持し目標を達成した。

●アウトカム④ 調査研究・発信

「学芸事業調査分析→発信事業」については新型コロナウイルス感染症の影響により、各種調査や会議開催が困難となったため、目的まで達成できなかったが、外部委員や調査研究事業の決定と公演視察を実施することができた。来年以降も継続し調査研究及び発信を進めていく。また、継続的にアンケートから来場者の年齢や要望を分析しラインアップの充実を図るため、WEBアンケートを導入し、コロナ禍においてもアンケートの回収率を維持できるよう努めた。(令和2年度回収率10%)

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んでいるか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んでいるか。

※『1. 事業概要／(2)令和2年度実施事業一覧』にある事業番号を表記しています。

●【事業番号1・3・4・5・6・7・9（内、中止となった事業＝1・3・4・6）】

鑑賞事業として初のオペラ公演や親子向けの作品を実施。新型コロナウイルス感染拡大や収容率制限の影響を受けつつも入場者率75%以上を達成し舞台芸術の多様性を観客に提示し新しい価値観との出会いを創出した。いずれも実施期間は概ね予定通り実施。コロナ禍での大・中規模の作品招聘では様々な想定外の対応が必要となり、収支を当初の計画通りに進めることは総じて難しかった。

- ・事業番号5は感染拡大や海外キャスト招聘の見通しが見えない中、キャスト変更や全体スケジュールの再調整、それに伴う地元の楽団・合唱団メンバーの再調整が発生。この影響で文芸費が当初予算から大きく増額した。
- ・事業番号7については、感染拡大の影響も鑑みてカンパニー側と協議し公演回数を2回→1回に変更。公演数の変更に伴い、収支ともに当初予算より大きな減額となった。

●【事業番号2・8（内、延期した事業＝2）】

- ・事業番号2の市民参加事業は、ワークショップや本番は中止(延期)したが、市民とアーティストをオンライン上でつなぎ公演当日の開演時間にあわせて生配信を実施。人と人とのつながりが希薄になる中、舞台芸術の力にあらためて気づく機会となった。事業費は公演創作に係る支出がほぼ発生せず大幅な減額となった。
- ・事業番号8は、事業の大きな特徴の地元若手劇作家による市内高齢者インタビューが実施できず、その部分で企画変更せざるを得なかったがこれまでに蓄積・構築した劇作家との関係性を活かし、それ以外は当初計画通り実施。事業費も大きな乖離なく進めた。なお、学校鑑賞を含めた3回公演の予定がコロナの影響で学校鑑賞は中止。感染拡大や収容人数制限の影響も見越して一般公演3回で設定し(本番は収容率50%制限)、収入減の影響を最大限おさえ出来るだけ多くの鑑賞機会を設けた。実施期間は感染拡大の状況から再検討し当初予定よりも可能な限り後ろにずらして実施したが、全体的に大きな変更は生じていない。

●【事業番号10・11・12・13・14・15・16・17（内、一部中止・変更した事業＝10・11・14・15）】

普及・人材育成事業でも、一部中止や変更、会場の使用人数制限下での実施など新型コロナウイルスの影響を受けたが、感染防止対策の徹底や実施形態などを工夫し、出来る限り当初計画に沿う形での実施に努めた。

- ・事業番号10・11は、上半期は中止とし、感染状況を見極めながら下半期は概ね予定通り実施。事業費は中止や実施規模縮小などにより移動・宿泊費や印刷製本費の支出が大幅に減額し結果的に大きく乖離した。
- ・事業番号14は、会場使用人数制限により定員数を減らしての実施となったため、参加者数が当初予定の約半数となった。収支については概ね予定通り進めることができた。
- ・事業番号15の市内小・中学校でのアウトリーチ事業は、実施校の募集期間に緊急事態宣言が発令された影響もあり例年よりも実施校数が減少したが、教育委員会や学校と情報共有しながら徹底した感染予防対策を行い、特別支援学校・学級も含め実施。費用面では実施校・回数の減少により移動・宿泊費などが減額となった。
- ・事業番号16は若者就労支援施設との連携による継続的なプログラム実施と新規領域リサーチを実施予定だったが、感染拡大の影響により当初計画の実施回数や参加人数の確保が難しい状況となり参加者数は大きく減少。連携先と密な連絡調整を行い参加者の心理的状況も考慮し、オンライン実施も取り入れながら目標としていた発表まで進めることができ、事業期間・収支面は概ね当初予定通り進めた。

(4) 創造性

自己評価

事業計画の内容が、独創性、新規性、先導性等に優れている（と認められる）か。

開館以来、劇場の事業計画やラインナップ内容の責任者としてプロデューサー制を導入している。現在は開館当初からの職員を育成しプロデューサーとして登用しており、地域のもつ歴史や特性、主な観客層や来場者の居住エリア、まだ劇場の事業が十分に届いていない領域や世代など、様々な事情を考慮したうえで企画や作品創作、公演の招聘を行い、より地域に根差した事業展開を可能にしている。

また、地域で活動するアーティストをローカルディレクターとして2名配置し、地域の演劇人との交流や作品創りへのアドバイスなど劇場との橋渡し役を担っている。さらに、地域の現状を分析しニーズを把握したうえで、自ら新しい企画も提案し、令和2年度は稽古場を活用して子どもたちが演劇や劇場に親しむきっかけを作る「あそびのじかん」を実施した。また、全国のアーティストとの交流や自らの作品創作にも積極的に取り組むことで、劇場事業の芸術性やアーティスト性の担保にもつながっている。

●【公演の企画内容、作品の芸術性の独創性、新規性、先導性等について】

- ① 独創性：開館2年目より続く市民参加作品「わたしの青い鳥」は、8歳～80歳代まで様々な年齢が一緒に参加できる本格的な舞台として市民に愛されてきた。ここまで幅広い年齢層での作品創作の例は少なく、練習方法や稽古進行、演出やパート割に至るまで様々な工夫をしながら実施している。令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響で通常公演は中止となったが、劇場職員有志による合唱とアーティストや過去参加者によるインタビューで構成した特別企画を ZOOM や YouTube で生配信し、この作品ならではの世界観を通常とは違う形で示すことができた。
- ② 新規性：指揮・井上道義/演出・野田秀樹という音楽界と演劇界の鬼才がタッグを組み、“誰もみたことのないオペラ”と称されジャンルを超えた上質な作品「フィガロの結婚」を自主事業としては初のオペラ公演として上演した。また、地元の楽団である響ホール室内合奏団と地域で活動する声楽家で結成した合唱団の出演により、新しい中にも親しみを感じられる北九州ならではの公演を市民に届けることができた。
- ③ 先導性：「Re:北九州の記憶」では、高齢者へのインタビューを経て地元の若手作家たちが新たに戯曲を書くという独自のスタイルにより、作品創作と劇作家の育成を両輪として実施してきた。これまで多くの作品を生み出してきたが、近年は戯曲を残していくだけでなく地域の中で活かしていくことを目指し、市民センターや図書館との連携企画も行っている。こうした取り組みは、作品を生み出した後、それを地域に広げてアーカイブしていくひとつのモデルとしても注目されており、今後もこれらの戯曲とそこに込められた“記憶”が地域の財産として残っていくような試みを続けていきたい。

●【人材養成、普及啓発の企画内容の独創性、新規性、先導性等について】

- ① 独創性：「高校生〔的〕シアター」は、将来について具体的に考え始める多感な時期である高校生に的（まと）を絞った取り組みであり、そのひとつである「高校生〔的〕チケット」ではチケット代を高校生でも購入しやすい価格（大ホール・中劇場 1,500 円、小劇場 1,000 円）に設定することで、より気軽に多くの作品に触れる機会を提供している。
- ② 新規性：先述のローカルディレクターによる新規企画「あそびのじかん」では、子どもたちの想像力やコミュニケーション力を活かした演劇ワークショップを軸に、「自由にあそぶ」ことを通じて子どもたちの発想や表現力、創造力を育むプログラムを実施した。これまで劇場で実施してきたような数日間で学ぶ芸術体験とはまた異なり、数か月にわたり定期的に劇場へ通いながら毎回違ったあそびを体験することで、劇場や演劇に親しみを持ってもらうと同時に、学年も学区も違う仲間との出会いや、新しい価値観や新たな自分を発見する機会を提供することができた。

自己評価

事業の実施によって、当該劇場・音楽堂等の国内外での評価の向上につながっている（と認められる）か。

コロナ禍においては、従来の【1】マスメディアへの働きかけによる、大衆へ向けた事業・文化芸術の社会的意義の発信に加え、外出機会等が減少する中で【2】自社メディアを活用した個人への発信を強化した。

【1】マスメディアへの掲載実績（助成対象事業のみ）

新聞	雑誌・FP	WEB	テレビ・ラジオ	合計
23	53	117	23	216

劇場初のオペラ公演「フィガロの結婚」では、地元の楽団と合唱団が公演に参加する話題性から『一流舞台芸術家と地域の音楽家の饗宴』（毎日新聞）として大きく報じられた。コロナ禍による約半年の劇場空白期後間もなくの事業でもあり、感染予防対策等とあわせて掲載された事で、劇場に観客を呼び戻す大きなインパクトとなった。開館以来続く市民参加型事業「わたしの青い鳥」はファイナルイヤーとして実施前より注目を集めていたが、コロナ禍により延期。同事業には長年のリピーターの存在があり、延期発表直後より事業を惜しむ声や劇場への温かな励ましが多数寄せられ、地域コミュニティ活性化への一助としての劇場の役割を再認識する事ができた。こうした声に応え、公演と同時刻に生配信企画を実施。視聴者数はアーカイブ含め 842 回と会場の中劇場のキャパシティ 700 席を上回ると共に、地元紙でも『多くの激励に応え 感謝の合唱』（西日本新聞）ほか 3 紙にて掲載いただいた。いずれにおいても劇場側の姿勢と支援者としての市民の声が同時に掲載された事で、地域における劇場への理解とプレゼンス向上に大きく寄与した。また 9 年目となる「Re:北九州の記憶」は、高齢者へのインタビューから地元劇作家が戯曲を書く従来の形は敵わなかったが、作家自身の記憶から戯曲を書く新たな形態で実施した結果、『新たな試みは、記憶の語り手である市民と創作者たちのつながりを深める機会になる』（西日本新聞）と、未曾有の事態と対峙しながらも挑戦を続ける劇場や実演家たちの姿勢を地域社会へ提示する事ができた。

【2】自社メディアの発信・登録状況（個別指標取得が不可であるため劇場全体数値とする）

ホームページ	Twitter		YouTube		LINE	Instagram
表示数	表示数	登録者数	再生数	登録者数	登録者数	登録者数
676,702PV	5,980,842 回	7,105 人	82,558 回	568 人	1,214 人	216 人

ホームページ表示数は公演等の中止に比例し前年比 43%に留まったが、支持層への情報が衰勢しないよう情報をつくり発信する姿勢でソーシャルメディアの活用に取り組み、Twitter 表示数は前年比 122%、YouTube 再生数は 115%、全てにおいて登録者数は右肩上がりに推移した。「フィガロの結婚」では、出演者らによる公演へのカウントダウンメッセージを配信。全 7 回の総再生数は 21,631 回となり観劇を待ちわびる観客の期待値に働きかけた。「Re:北九州の記憶」では、劇場閉館期に過去の戯曲をリーディング動画として配信する企画を実施。全 4 回で 2,150 回の再生数を獲得し、特に若年層など新しい世代へのアプローチにつながった。またコロナ禍においてはワークショップ等も大幅な参加人数制限が必要であったため、「ダンスダイブ～ワークショップ編～」では実施風景と共にアーティスト・参加者双方のコメントを収録した事後動画を発信した（2 回計で総再生数 1,831 回）。特に親子向け実施回での反応が大きく、ストレスを受けた子ども達が文化芸術に触れることの意義を広く伝播させ、本市の課題でもある子育て環境の充実の一助ともなった。

上記のとおり、外部メディアからの客観的な評価と自社メディアによる多様な発信で、厳しい状況下でも歩みを止めない劇場の姿勢を提示する事が出来た。これにより観客や参加者を含む地域住民、行政、実演家など劇場を取り巻くステークホルダーからの信頼獲得に繋がったと考える。また県内外からの視察等もオンライン含め 9 件行っており、蓄積したノウハウを広く共有する事で我が国の文化芸術水準向上に寄与したと考える。

(5) 持続性

自己評価

事業計画を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

持続的なアウトカムの発現・定着が期待できるか。

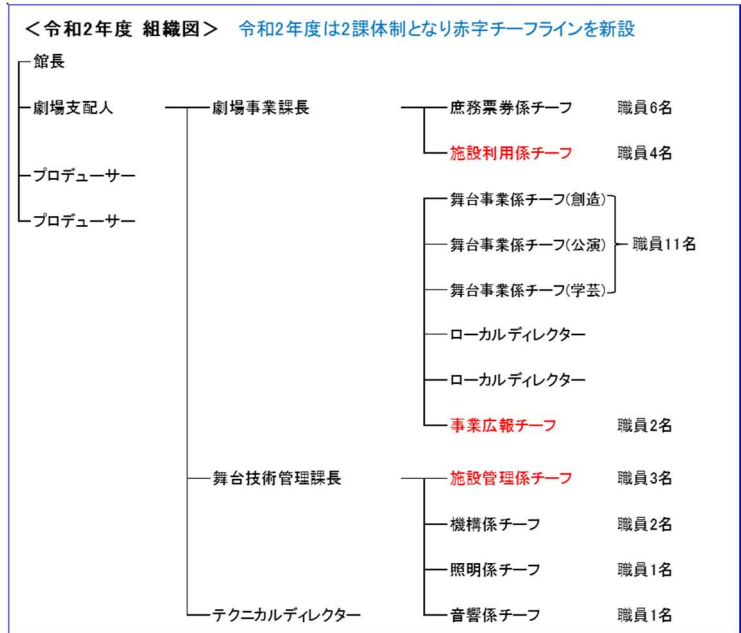
【人事戦略】

●組織改変と計画的な人材育成

開館当初より市派遣職員数は一定数担保されているものの、近年では減少傾向にある。また設置者である市の財政状況がさらに厳しくなることも考えられ、独自の財源確保等が求められている。

そういった状況からも、事業担当職員からの生え抜きであるプロデューサーの登用に加え、管理職級への昇任など、将来的に事業運営・経営に関わる人材を育成する計画を立て、令和2年度の組織改正により各分野の専任チーフの配置を整えた。各チーフの専門的スキルを活かし、勤続年数が短い職員へのフォロ

ーアップ体制を強化するとともに、今後は一定の勤続年数を経て専門なスキルを養った人材の異動ローテーションを開始する。これまで個々が蓄積してきた専門的な知識や経験を活かしながら、劇場運営に係る様々な部署での経験を積み多方面の知識を持つ人材を育成することで、今後も持続可能な組織活動が期待できる。



【経営戦略】

●安定的な財源確保の取り組み

令和元年度から5年間、劇場の指定管理者に指定されている。独自の財源確保に取り組むため、令和2年度から新設された財団の経営部門と劇場事業課が連携し、計画的な収入源確保のため新規事業展開の協議を始めた。一方で、コロナ禍での新たな取組みとして、YouTube 配信や SNS 展開を更に進め、発信事業の強化を行った。これまで継続してきた事業を活かしたライブ動画やアーカイブ作品の配信を通し創造性の新たな可能性を打ち出すことができ、その結果 YouTube 登録者数の増加や再生回数が大幅に増加した。今後も引き続き、創客や財源確保を計画的に行っていく。

<YouTube 前年対比>

年度	R1 年度	R2 年度	前年比
登録者数	246 人	568 人	231%
再生回数	71,494 回	82,558 回	115%

●友の会制度の見直し

顧客ニーズに沿ったサービスの提供とそのために必要な財源を確保するため、会員制度の大幅な見直しを行った。引き続き、顧客満足度の向上と新たな劇場ファンの獲得に向け、顧客ニーズの把握と必要な資金確保に努めていく。